広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	謎語から見る『西廂記』故事の受容 : 明清時代を中心に
Author(s)	樊, 可人
Citation	中國中世文學研究 , 73 : 88 - 105
Issue Date	2020-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049266
Right	
Relation	

謎語から見る『西廂記』故事の受容—明清時代を中心に—

樊　可人

はじめに

筆者はこれまでに、『西廂記』と八股文、酒令との関わりについてそれぞれ考察を行った[1]。八股文、酒令はいずれも文字を用いて行われる遊びであり、戯曲や小説を題材とするそれらの関連作品の中に『西廂記』と関わりのあるものが多く存在することは、張生と崔鶯鶯の恋物語を語る該作品がいかに人々に熟知され、愛されていたかを裏付けている。

『西廂記』と関わりのある酒令について、周作人は「西廂記酒令」という一文で論じたことがあり[2]、文章の最後で次のように述べている。

> 文字上的雕虫小技、非壮夫所当為、唯漢字性質上有此遊戯之可能、学者亦不可忽視、則此類酒令与灯謎・詩鐘・対聯等同是很好的資料也。
>
> 文字上の取るに足りない技能は才知が優れる方が使うべきものではないが、ただ漢字だけが性質上このような遊戯の可能性を有しているため、学者もまたおろそかにしてはいけない。そうであれば、この類の酒令と灯謎、詩鐘、対聯なども同じく非常によい資料である。

酒令を含め、灯謎（なぞなぞを書いた紙を灯籠やちょうちんに貼り、人に当てさせる遊び）や対聯はいずれも千年以上の歴史があり、それぞれに多くの文学作品が取り込まれているため、民俗学研究だけでなく、文学作品の受容問題を研究する上でも重要な価値を有すると考えられる。筆者は『西廂記』と酒令との関わりについて調べるうちに、『西廂記』を題材にした謎語も明代から現在に至るまで数多く残されていることに気づいた。

灯謎を含む謎語について、銭南揚、陳光堯、楊汝泉、陸滋源はそれぞれの論著で、その歴史や種類について論じており[3]、呉修喆は明代の日用類書や清末民国期の資料に焦点を当てて、明末の灯謎が持つ特徴や灯謎に対する意識の変化について考察を加えた[4]。以上の先行研究によって中国における謎語の変遷や発展の全体像は明らかにされた。しかし、『鏡花縁』や『二十年目睹之怪現状』といった白話小説にも少なからず用いられる『西廂記』と関わりのある謎語は、『西廂記』の受容問題と深く関わっていながらも、従来の研究では、あまり目が向けられていない。

伏滌修氏は『『西廂記』接受史研究』で[5]、清・沈桐威の「『西廂』灯謎絶妙好辞」を取り上げ、『西廂記』と関わりのある謎語を簡単に紹介したが、沈氏の作品の内容にはさほど価値がないと指摘した。確かに、単に沈氏の作品だけを見れば、文人の遊びに過ぎないかもしれないが、明清時代に現れた『西廂記』と関わりのある謎語の数は千を越えており、その内容から『西廂記』受容の一端を明かすことができるのではないかと考える。

そこで本稿では、古今の謎語を幅広く収録する『中華謎書集成』に収められた、『西廂記』と関わりのある謎語を中心に考察を行い、謎語における『西廂記』受容の特徴やそれらの謎語と酒令などとの関わりを探りたい。

一、明代における『西廂記』と関わりのある謎語

『西廂記』は元代に生まれた作品であるが、同作品と関わりのある謎語で現在見られるものはのちの明清時代に隆盛を迎えた。しかし、謎語の歴史は明代より遥かに前に遡ることができる。

佐久間貞次郎は『支那風俗春秋』「灯謎酒令」において次のように述べる[6]。

> 灯謎といふのは、一に文虎とも曰ひ、商灯又は春灯とも曰ふ。更に度詞とも曰つて、文人墨客のやる消遣の遊戯としては最も風雅なものとされて居る。…蓋し灯謎の一事たるや、読書講学の士に取りては、殊に能く其心機を啓き、智識を長ずるの捷径として、古来から単なる消遣の遊戯としてのみでなく、士人の間に風行したものである。…今ま灯謎の沿革を辿ると、原とは左伝襄三十年に「史趙曰亥有二首六身」とあるに始まるといふことだ。…その後に漢末の孔融其辞を隠し、六朝に至つて始めて盛んになつた。呉自牧の夢粱録や、周密の武林旧事にも此事を載せてあり、明末楊州の緑柳城郭の間、士民富饒の致すところ、斯道亦た大に興り、…明末に至つて如何に盛んであつたかは、阮大鋮の戯曲に春灯謎といふのがあるのを見ても知られるであろう。…前清の乾隆、嘉慶時代は、海内昇平であつたので文人の好事一世を風靡し、江の以南楊州の外、蘇州、松江、常州、杭州、嘉興、湖州等の各府県は、湖山秀麗で、文章の淵藪であるだけに、新春歳首に値ふ毎に、騒壇の墨客、烏衣の子弟は、華堂深き処に於て、筵を肆ね席を設け、灯を張り謎を懸けて、闘角鈎心、争つて

相誇耀したものである。

謎語の歴史を遡ると、先秦時代に諧謔や諷諫に用いられる「隠語」に辿り着くことができる。時代の変遷に伴い、謎語は派生して多様になった。『武林旧事』の「元夕」一項に臨安の「灯市」が詳しく描写されており[7]、同書の「灯品」に「灯品至多、蘇・福為冠、新安晩出、精妙絶倫。…又有以絹灯翦写詩詞、時寓譏笑、及画人物、蔵頭隠語、及旧京諢語、戯弄行人。」（灯品 至って多く、蘇・福 冠と為り、新安 晩く出づるも、精妙にして絶倫なり。…又た絹灯を以って翦ちて詩詞を写し、時に譏笑を寓せ、人物を画くに及び、頭を蔵し語を隠し、旧京の諢語に及び、行人を戯弄する有り。）とあることから、宋代には灯籠に謎語の問題文（以下、「謎面」）を書き、その答え（以下、「謎底」）を人々に当てさせるものが既に現れるようになったことが分かる。また、明代に入ると、灯謎は盛んに行われるようになり、清代ではさらに発展して広がった。

筆者が調べたところ、遅くとも明の嘉靖年間には『西廂記』と関わりのある謎語が現れた。李開先の『詩禅』に[8]、「月欄　西廂二句　只恐怕嫦娥心動、因此上囲住了広寒宮。」（下線部は「謎底」。以下同じ。）のように『西廂記』の内容を当てさせる謎語が十二条あり（そのうち一条は『詩禅』の跋文に見られる）、「両下里做人難　骨牌名　八不就」や「普救在張生不在　常言　寺有儒無似有如無」のように、『西廂記』の曲文や『西廂記』と関わりのある要素を用いて作られた謎語を加えると二十条がある。

『詩禅』に収められる門人廉珍の跋文に、

乙卯元夜、衆客因観灯過中麓師宅、問曰、「君胡不張華灯而出奇謎、応佳節而為楽事耶。…」…衆因請観旧所為灯謎。中麓遂出是編示之、増新慨而感旧事、共謀刻之。

乙卯の元夜、衆客 観灯に因って中麓師の宅に過り、問ひて曰く、「君 胡ぞ華灯を張り奇謎を出だし、佳節に応じて楽事を為さざらんや…」と。…衆 因って旧為る所の灯謎を観んことを請ふ。中麓 遂に是の編を出だして之に示し、新慨を増して旧事に感じ、共に之を刻せんと謀る。

とあることから、前文に挙げた『西廂記』と関わりのある謎語を含む作品は灯謎として用いられることがあったと考えられる。しかし、これらの謎語は元宵節のような節句にしか人々に楽しまれなかったわけではない。黄元吉という人が『詩禅』に付した跋文に、

邸報到日、値中麓延客、即席以此作灯謎。在『西廂記』中、一句九字、中者免酒、不則罰一巨觥。至末座一少年、厲声云、「筆尖児横掃了五千人。」中麓笑曰、「是也。」衆客各撫掌大笑哄堂。

邸報 到れる日、中麓の客を延くに値たり、席に即きて此を以て灯謎を作る。『西廂記』の中に在りて、一句九字、中たれば酒を免るも、不ざれば則ち一巨觥を罰せらる。末の座の一少年に至り、声を厲ぎて云ふ、「筆尖児 五千人を横掃了す」と。中麓 笑ひて曰く、「是なり」と。衆客 各撫掌して大笑哄堂す。

と記されており、李開先は酒席で『西廂記』をネタとする灯謎を作り、客人に当てさせた。当たった者は罰杯を免れるが、外れた者は大盃で罰杯を飲まされる。このことから、『西廂記』と関わりのある灯謎は時に酒席で酒令として用いられることが分かる。先行研究では、後述する黄周星が初めて謎語を酒席に取り入れた文人とされているが[9]、『詩禅』の記述から、謎語と酒令の関わりは明代に遡ることができる。また、李開先は「改定元賢伝奇序」において、『西廂記』は「今雖婦人女子、皆能挙其辞。」（今婦人女子と雖も、皆能く其の辞を挙ぐ。）と述べており、当時「誰でも」と言えるほどに多くの人々が『西廂記』の内容を知っていたことがわかる。こうした状況が、『西廂記』と関わりのある酒令や灯謎の流行の基礎となったと考えられる。

『詩禅』以外に、明代の酒令を広く集めた『新刻時尚華筵趣楽談笑酒令』（作者不詳）からも[10]、『西廂記』故事をネタにして作られた酒令と灯謎の相互の関連が窺える。

本書の下段には「酒令」「骰子令」「談笑門」、上段には「新奇灯謎」「硃窩賽骰」「硃窩譜式」「笑談詩選」「皇明詩選」という順に部類が並べられている。その「新奇灯謎」の曲牌名類に「崔鶯鶯軽掲紅爐蓋　焼夜香」（崔鶯鶯 軽く紅爐蓋を掲ぐ　夜香を焼く）という作品が収められているのに対し、「酒令」には「一令要二字合成一字、要四個古人事、宜合韻。」（一令 二字合はして一字と成すを要め、四個の古人の事を要め、宜しく韻に合はすべし。）という一種があり、その一例として、

禾日便為香、張生問紅娘。鶯々何処去、後園焼夜香。
禾日 便ち香と為し、張生 紅娘に問ふ。鶯々 何処に去るか、後園にて夜香を焼く。

が挙げられている。三句目と四句目は、崔鶯鶯が夜の庭園で線香を立てる場面を踏まえている。これは、先に挙げた「焼夜香」（夜香を焼く）という謎語と共通の要素を用いている。後文に改めて述べるが、こうした灯謎と酒令の共通性は清代にも見受けられる。崔鶯鶯が線香を立てるのを始めるとする幾つかの場面・要素は、複数の謎

語作品専門書に収録されていることから、人々に広く認識されていたことが窺える。

「焼夜香」のほかに、「新奇灯謎」の「飲食類」と「字意雑類」には、それぞれ次の二条のような『西廂記』故事と関わりのある謎語が収められている。

相国行祠遇解張、良縁配説托紅娘。海棠花下伝書礼、約我佳期在粉牆。是梅杏

相国の行祠にて解張に遇ひ、良縁の配説は紅娘に托(よ)す。海棠花の下に書礼を伝へ、我に約(まと)ひて佳期 粉牆に在り。是れ梅杏

正想鶯鶯又一空、偶然月下得相逢。共約他時来普救、竹林之下語从容。是肯等字

正に鶯鶯を想(おも)はんとするも又た一たび空(むな)しくし、偶然にして月の下に相逢するを得。共に約(まと)ひて他時普救に来(きた)り、竹林の下に語ること从容なり。是れ肯等の字

両者はそれぞれ崔鶯鶯と張生の視点から互いに密会の約束をすることを詠じている。さらに、「詞曲類」には、老夫人（崔鶯鶯の母）の就寝後、張生と崔鶯鶯に一夜を共にさせるため、紅娘が寝具を持って行く場面をもとに作られた灯謎が見られる。

灯影沈沈漏転深　更、遅遅月色夜凄其　深。紅娘私地携衾至、已是萱堂睡熟時　背母。

灯影 沈沈として漏 深きに転じ 更、遅遅なる月色 夜凄(さむ)からざらんか 深。紅娘 私地にして衾を携へて 至れば、已に是れ萱堂の睡熟たる時なり 母に背く。

一句目と二句目の謎底「更」「深」と三、四句の謎底「背母」を合わせると、「更深背母」（更 深くして母に背く）という、継母に再婚を強要された『荊釵記』の女主人公玉蓮が深夜に密かに家出して川に身投げをすることで自らの貞操を保とうとする場面に歌う曲文となる。筆者はかつて江戸時代の日本に伝わった明清楽に見られる『西廂記』と関わりのある曲について考察し[11]、これらの作品に特によく歌われるのは、張生が崔鶯鶯に会うために壁を越える場面であることを明らかにした。そこで、以上に挙げた三例を見ると、いずれも張生と崔鶯鶯が（紅娘の仲立ちのもとで）密会を図ろうとすることと関わりのある場面が用いられている。この点においては、明清楽に歌われる『西廂記』と関わりのある場面とかなり共通性を持っている。

「新奇灯謎」のほかに、自ら『西廂記』に批評を付けた陳継儒編纂の『精輯時興雅謎』にも『西廂記』と関わりのある謎語が収録されている[12]。

鶯鶯焼夜香、紅娘姐将半枝香插在香几上。我只道張生跳粉牆、却原来是法聡和尚。

鶯鶯は夜香を立て、紅娘ねえさんは半分しか残らない線香を香机に挿した。私はただ張生が白壁を乗り越えるとばかり思っていたが、なんと法聡和尚であった。

この謎語の謎底は「禿」であり、二句目は「謎眼」（謎解きの鍵）があるところと考えられる。ここでも、「新奇灯謎」所収の『西廂記』と関わりのある謎語と同様、崔鶯鶯が線香を立てる場面、張生が壁を乗り越える場面が用いられている。

以上に挙げた書物に加えて、崇禎年間に成立したと思われる張雲竜編の謎書『広社』にも『西廂記』の曲文を引用して作られた謎語が収録されている[13]。本書は李開先の『詩禅』と同様、謎語の謎面によって謎底の同音異語を推し量り、それによって真の答えを突き止める謎語（前掲『詩禅』の「寺有儒無　似有如無」はそれである）が多く収録されており、このような謎語の作り方は清代の「竹西春社」に受け継がれている[14]。

二、清代における『西廂記』と関わりのある謎語

『西廂記』は誕生して以来、多くの注釈書や上演等によってその物語や内容が知識層から一般民衆にまで広く知られるようになった。また、『西廂記』と関わりのある周辺作品も何らかのきっかけで作られ、それがさらに多く『西廂記』と関わりのある作品を生み出す場合もあった。清初の尤侗が書いた八股文「怎当他臨去秋波那一転」がそれである。

『西廂記』にある曲文「怎当他臨去秋波那一転」を題にして作られた該文章が順治帝に称賛されたため、尤侗は大いに名を上げた。その後、『西廂記』の曲文を題にして作られた八股文が多く現れた[15]。黄周星はその作者の一人である。尤侗と同じく「怎当他臨去秋波那一転」を題にして六篇の八股文を作った彼には、謎語と関わりのある『廋詞』という作品がある。

『中華謎書集成』の解題によると、本作品は咄咄夫『一夕話二刻』、張潮『昭代叢書』に収録されており、光緒十一年（一八八五）正音書屋刊の『八咏楼新編灯謎』も実は異名同作である[16]。書名から、『廋詞』所収の内容は光緒年間に灯謎として使われたことがあったと推測できる。しかし、江山風月主人による題言や張潮が書いた「廋詞小引」から、本作品はもとは酒席で酒令として使われていたことが分かる。

前者の題言には、次のようにある。

林閭多暇、集知己数人、談宴竟日。酒闌燭跋之余、輒取古人姓名為隠語、以供射覆、中者挙大白酬之、不中者罰以苦茗。亦閑居楽事也。

林閭に暇多く、知己数人を集め、談宴すること竟日なり。酒闌にして燭跋なるの余、輒ち古人の姓名を取りて隠語を為し、以て射覆するに供へ、中たれば大白を挙げて之に酬ひ、中たらざれば罰するに苦茗を以てす。亦た閑居の楽事なり。

このことに対し、張潮も自ら書いた小引に次のように評価している。

九煙黄先生、作小箋四十幅。毎幅載廋詞四条、以行觴政。中者賞、不中者罰。瓊筵射覆、真足以益神智而長聡明。有如此下酒物、一斗豈足多乎。

九煙黄先生、小箋四十幅を作る。毎幅に廋詞四条を載せ、以て觴政を行ふ。中たる者は賞められ、中たらざる者は罰せらる。瓊筵にて射覆するは、真に以て神智を益して聡明を長くするに足る。此くの如き下酒物有れば、一斗豈に多しとするに足らんや。

以上の引用に紹介されているように、黄周星は古人の名前に関する謎語と酒を飲む指示を箋に書き、それらの作は酒令として遊興に供された。その第三十三箋のうちの一条は、「一派峰巒無限好、幽禽相対更頻啼。」（一派の峰巒 無限にして好く、幽禽 相対して更に頻りに啼く。）で唐代の三文字の名前の女性（唐女人三字）を当てさせる謎語が書かれている。その謎語の謎底は『西廂記』故事の女主人公「崔鶯鶯」である。

『廋詞』所収の「崔鶯鶯」謎は、劉廷璣の『在園雑志』（康熙五十四年（一七一五）自序付）にも謎語を論じる際の例として挙げられ[17]、光緒五年（一八七九）刊の『灯謎新編』にも収録されていることから[18]、清末に至ってもなお灯謎として遊興に供されていたと思われる。

『廋詞』のほかに、『巾箱小品』や『酒令叢鈔』所収の「西廂記酒令」からも、『西廂記』と関わりのある灯謎との繋がりが窺える。例えば、『巾箱小品』の「西廂記酒令」第二十三条は「夫人只一家。〔席間同姓（飲め）〕」（夫人は只だ一家。〔席間の同姓（飲め）〕）となっているのに対し[19]、道光十七年（一八三七）刊の許桂林『七嬉』の「氷天謎虎」には「同姓為婚　五字　夫人只一家」（同姓 婚を為す　五字　夫人は只だ一家）という灯謎が収録されている。

『西廂記』と関わりのある灯謎は時に酒令として遊興に供され、逆に同作品と関わりのある酒令も灯謎として遊興に供されたのである。こうした現象が明清時代に多く発生したことは、想像に難くない。

以上のような『西廂記』と関わりのある謎語の継承の

例はほかにもいくつかある。例えば、清代に何度も再版増訂された咄咄夫の『一夕話・雅謎』には、第一節に挙げた陳継儒編纂の『精輯時興雅謎』とほぼ同じの謎語、

鶯鶯焼夜香、香頭児放在香几上。我只道是俏書生、原来是法聡和尚。

鶯鶯は夜香を立て、線香の頭の部分を香机に挿した。私はただ眉目良い書生だと思ったが、なんと法聡和尚であった。

が収録されており、その謎底も同じく「禿」字である。また、乾隆年間に出され、のちに再版を重ねた銭徳蒼の『解人頤広集・消悶集』にも[20]、文字には多少異同があるが[21]、同じ謎語が収録されている。さらに、光緒十三年（一八八七）に刊行された東墅灯社（灯謎愛好者の集まり）の『東墅文字禅』巻四には[22]、「禿」字を謎面とし、『西廂記』に見られる二句の曲文を当てさせる謎語が収録されている。その謎底となる「只少個円光、便是捏塑的僧伽像」（円光があれば、泥塑の仏像になるのだ）は張生が法本を訪ねた時、歌った曲詞である。そのほか、「禿」字を当てさせる謎語には第一節に挙げた「新奇灯謎」の「一片沈香木、放在几子上。遠看似秀才、近看似和尚。」（一片の沈香木、放きて几子の上に在り。遠く看れば秀才に似るも、近く看れば和尚に似る。）がある。謎語の謎面から見れば、「新奇灯謎」所収の「禿」字の謎語は「鶯鶯焼夜香」の語より始まる同謎語と構造がほぼ同じである。しかし、清代に入ると、謎語の謎面が「沈香木」「几子」「秀才」「和尚」のような一般化された表現を用いる「禿」字の謎語は継承されておらず、「鶯鶯（焼香）」「法聡」のような『西廂記』故事の登場人物や場面を直接表す語を用いた、謎面が具体化されたほうだけが継承されている。

陳継儒（松江華亭）や銭徳蒼（江蘇長洲）の出身地から推測すると、「鶯鶯焼夜香」を謎面とする「禿」字の謎語は呉の辺りから興ったと考えられる。また、嘉慶・道光年間に官僚として活躍していた梁章鉅の『浪跡叢談』に次のような記述が見られる[23]。

近日呉中多尚『西廂』謎、如「一鞭残照裏」、猜「馬児向西」、「連元」二字、猜「又是一個文章魁首」、皆妙。

近日 呉中多く『西廂』の謎を尚び、「一鞭 残照の裏」もて、「馬児 西に向かふ」を猜らしめ、「連元」の二字もて、「又た是れ一個の文章魁首」を猜らしむるが如きは、皆妙なり。

『西廂記』を利用して謎語を作る風潮は、謎書の編纂者や謎語の作者が編纂・創作する時に、同作品と関わりの

ある要素を多く取り込むという状況を導いただろう。

清代の『西廂記』と関わりのある謎語に使われる同作品の版本について、中華民国の頃を生きた薛鳳昌は次のように指摘している[24]。

伝奇詞曲、種類甚多、而入謎者莫多於『六才』、若『琵琶記』与『牡丹亭』、百不一二見。

伝奇詞曲、種類 甚だ多く、而して謎に入れらるる者『六才』より多きは莫く、『琵琶記』と『牡丹亭』の若きは、百に一二を見ず。

『六才』は金聖歎が『西廂記』に批評を付けた『第六才子書』である。乾隆年間の頃に生きていた王応奎は随筆の中で『第六才子書』の流行りについて次のように記している[25]。

金人瑞、字若采、聖歎其法号也。…好評解稗官詞曲、手眼独出。初批『水滸伝』行世、崑山帰元恭荘見之曰、「此倡乱之書也。」継又批『西廂記』行世、元恭見之又曰、「此誨淫之書也。」顧一時学者、愛読聖歎書、幾于家置一編。

金人瑞、字は若采、聖歎は其の法号なり。…稗官詞曲を評解するを好み、手眼独り出づ。初めて『水滸伝』を批して世に行はれ、崑山の帰元恭荘 之を見て曰く、「此倡乱の書なり」と。継ぎて又た『西廂記』を批して世に行はれ、元恭 之を見て又た曰く、「此誨淫の書なり」と。顧ただ一時の学者、聖歎の書を読むを愛し、家ごとに一編を置くに幾し。

清代の灯謎作品における『第六才子書』の頻出も、まさに薛・王二氏の指摘通りである。例えば、企杜が咸豊六年（一八五六）に刊行した『竜山灯虎』には[26]、八百一条の灯謎が収録されているが、そのうち「負荊　西廂一句　背着夫人」のように『西廂記』の内容を当てさせる謎語は七十六条あり、さらに「紅娘做的牽頭　詩経一句　有鶯其領」のように『西廂記』からの引用を謎語の謎面とし、ほかの作品を当てさせるものを加えれば、『西廂記』と関わりのある謎語は全書のおよそ十分の一を占める。本書では、『西廂記』の内容を当てさせる謎語には「西廂一句」と書かれているが、実際の内容から判断すると、『第六才子書』に当たる[27]。『西廂記』の引用に対し、『牡丹亭』と関わりのある謎語は僅か三条であり、その中には「拷紅」という『西廂記』と関わりのあるプロットを謎面にするものもある[28]。また、薛氏が言及した『琵琶記』を当てさせる謎語は僅か一条しかない。

光緒六年（一八八〇）に成立した『余生虎口虎』は、葛甡という人が幅広く集めた灯謎作品集である[29]。この書においても、『西廂記』の引用はほかの戯曲や小説作品

より断然多い。同書には二千三百八十四条の謎語が収録されており、「四書一句」「四書人名一」のように「四書」と関わりのある答えを当てさせる指示が明確に書かれた謎語が二百六十条で最も多く[30]、「古人（別号）」を当てさせる謎語が百八十五条でそれに次ぐ。「古官」「古女」等のような同じく古人を当てさせる謎語を加えれば、人名を当てさせる謎語が本書の作品のもう一本の主要な柱となっている。「四書」のほかに、「五経」や唐詩と関わりのある謎語も多少収録されており、「五経」の中では『易経』が百四十九条で最多である。

一方、戯曲や小説と関わりのある作品では、「六才一句」「六才批」と書かれ、『第六才子書』の表現や金聖歎が付けた批評を当てさせる謎語が百五十四条収録されている。これに対し、『紅楼夢』や『水滸伝』（「五才」）の人物等を当てさせる指示が書かれた作品はそれぞれ四十五条と三十条しかなく、『第六才子書』の半分にも達していない。このほか、『琵琶記』『西遊記』『牡丹亭』『聊斎志異』『品花宝鑑』などの戯曲や小説を当てさせる謎語が散見するが、いずれも十個前後にとどまる。

元の宮天挺が書いた『范張鶏黍』に、王仲略という学識のない官吏が『春秋』を『西廂記』として認識する場面があり[31]、ここには揶揄する意味が含まれるのだが、それ以来『西廂記』を『（崔氏）春秋』と呼ぶ記述が随筆に散見するようになった[32]。『竜山灯虎』と『余生虎口虎』に収録された作品の状況から見ると、「四書五経」のような知識人の必読書と比較しても、『西廂記』と関わりがある要素の使用もかなりの割合を占めている。

このような高い割合の背後には、王実甫の『西廂記』に基づいて作られた『第六才子書』の流行が大きな原因として挙げられる。ただし、『余生虎口虎』戯題小謎所収の「拷紅　又（筆者：四書一句）丹朱之不肖」「游殿　又（筆者：詞牌名一）荊州曲」の謎面である「拷紅」「游殿」は、李日華の『南西廂記』に基づいて改編された銭徳蒼の『綴白裘』所収の『西廂記』折子戯から取ったものかもしれない[33]。

三、文才を競うための工具書

前述したように、『西廂記』のほか、『琵琶記』や『牡丹亭』といった作品もしばしば謎語に引用されるが、いずれも引用数は『西廂記』に遥かに及ばない。その理由として、清末民初の張起南が『棗園春灯話』において次のような指摘をしている[34]。

詞為余所癖好、幼時即酷嗜之。而近日文人、諳此者実尠。初時試制数条、知不可行、乃求之於曲。然各種著名伝奇、如『琵琶記』『牡丹亭』『桃花扇』『長生殿』、皆動輒四五十折、傷於繁博、読者已寡、記之者尤稀。即如『長生殿』一種、余昔年所朝夕把翫、

背誦不遺一字者也、迄今追憶、已十不得一、足見強記之難。惟『西廂記』、事簡而詞精、舎冬烘先生外、幾於無人不読、取作謎材、最為相宜。余所制不下二百余条、前集羅掘既窮、不得不稍借才於続部、雖優劣判若霄壤、然以之制謎、固無傷也。

詞　余の癖好する所と為り、幼時に即ち酷だ之を嗜む。而して近日の文人、此を諳んずる者　実に尠なし。初時に試みに数条を制し、行ふべからざるを知り、乃ち之を曲に求む。然れども各種の著名伝奇、『琵琶記』『牡丹亭』『桃花扇』『長生殿』の如きは、皆　動ければ輒ち四五十折にして、繁博に傷られ、読者　已に寡なく、之を記す者　尤も稀なり。即ひ『長生殿』一種の如く、余　昔年の朝夕に把翫し、背誦して一字を遺さざる所の者なるも、今に迄びて追憶すれば、已に十に一を得ず、強記の難きことを見るに足る。惟だ『西廂記』は、事　簡にして詞　精なるのみ、冬烘先生を舎く外、人として読まざる無きに幾く、取りて謎材と作せば、最も相宜為り。余が制する所一百余条に下らず、前集羅掘せられて既に窮まり、稍才を続部に借りざるを得ず、優劣　判かるること霄壤の若きと雖も、然れども之を以て謎を制するに、固より傷ること無きなり。

『琵琶記』『牡丹亭』『桃花扇』『長生殿』は、銭徳蒼の『綴白裘』にも折子戯が収録されることから、舞台でしばしば上演される作品であったことが窺える。そのため、これらの作品は決して人気がないとは言えない。しかし、これらの作品はいずれも『西廂記』より長く、その内容を丸覚えできる人はほとんど存在しない。そこで張起南は、謎語の素材とするには、物語が簡潔で表現が精錬されている『西廂記』がもっとも相応しいと述べた。張氏は『水滸伝』『西遊記』『紅楼夢』といった小説に言及しなかったが、それらも謎語における用いられ方が『西廂記』とは異なる。『西廂記』と関わりのある謎語は作品の人物名を当てさせるものもあれば、内容を当てさせるものもあるのに対し、これらの小説と関わりのある謎語は作品の人物名を当てさせるものがほとんどである。小説は内容がさらに繁雑であるため、謎語に取り込むのに支障があったのかもしれない。

このように、『西廂記』以外の戯曲や小説と関わりのある謎語が比較的少ないのに対し、『西廂記』と関わりのある謎語においては、前述した「崔鶯鶯」謎や「禿」字謎のように時代を越えて継承されているもののほか、前人が使った内容を避けつつ同作品の新しい箇所を取り込んだ謎語も次々と作られた。

例えば、『第六才子書』三之一の「油葫蘆」曲を見てみよう。

一個憔悴潘郎鬢有糸①、一個杜韋娘不似旧時②、帯囲寛過了瘦腰肢③。一個睡昏昏不待観経史④、一個意懸懸懶去拈針黹⑤。一個糸桐上調弄出離恨譜⑥、一個花箋上刪抹成断腸詩⑦。筆下幽情⑧、弦上的心事⑨、一様是相思⑩。

これに対し、道光年間に成立したとされる夏之時の『春宵博雅』（道光十二年（一八三二）凡例付）には[35]、「憔悴潘郎鬢有糸　老者安之」と、「油葫蘆」曲の①を謎面にして『論語』の言葉を当てさせるもの、「一个花箋上刪抹断腸詞。　崔涂」と、同曲の⑦を利用して唐の人「崔涂」を当てさせるもの、「帯囲寛過了瘦腰肢　瘠環」と、③を利用して春秋戦国時代の人「瘠環」を当てさせるものが収録されている。

また、前掲した咸豊六年（一八五六）刊の『竜山灯虎』には「春風一曲人憔悴　西廂一句　杜韋娘不似旧時」として②を当てさせるもの、「鬼趣図　西廂一句　筆下幽情」として⑧を当てさせるものが収録されている。

このほか、光緒二年（一八七六）に刊行された『十五家妙契同岑集謎選』所収の「吟香館謎稿」には[36]、「一個憔悴潘郎鬢有糸、一個杜韋娘不似旧時　詩経　公子偕老」と、①と②を組み合わせて『詩経』の言葉を当てさせるものが収録されている。

その一年後の光緒三年（一八七七）に刊行された『十四家新謎約選』所収の「西峰書室謎稿」には[37]、「分明怨恨曲中論　弦上的心事」と、杜甫の詩を利用して⑨を当てさせるものが収録されており、光緒五年（一八七九）刊の『灯謎新編』には「林黛玉撫琴悲往事、薛宝釵制曲写悲懐。　六才　一個糸桐上調弄出離恨譜、一個花箋上刪抹成断腸語。」と[38]、『紅楼夢』と関わりのある内容を謎面にして⑥⑦を当てさせるものが収められている。

さらに、前掲した光緒六年（一八八〇）成立の『余生虎口虎』には、「双紅豆　又（筆者：六才一句）　一様是相思」として⑩を当てさせるものが収録されている。

このように、「油葫蘆」は、時代が下るにつれ、ほとんどの句が謎面か謎底にされ、独自性がある謎語が次々と生み出されていった。

同じような例として四之二の「鬼三台」曲が挙げられる。

夜坐時停了鍼繡①、和小姐閑窮究②。説哥々病久③、喏両個背着夫人④、向書房問候⑤。他説、夫人近来恩做仇⑥、教小生半途喜変憂⑦。他説、紅娘你且先行⑧、他説、小姐権時落後⑨。

まず、前掲した『春宵博雅』（一八三二）には、「夜深　時停了針繡、説張生哥哥病久。　議郎」と①③を利用して議郎という官名を当てさせるもの、「小姐権時落後　姑阪」と⑨を利用して『玉簪記』の標目「姑阪」を当てさ

せるもの、「和小姐閑窮究　讎」と②を利用して「讎」字を当てさせるものが収録されている。

また、前掲した『竜山灯虎』（一八五六）に「負荊　西廂一句　背着夫人」として④を当てさせるものが、『余生虎口虎』（一八八〇）に「我同小姐背着夫人、向書房問候。美人一　紅線」と④⑤を利用して『甘沢謡』に見られる人物「紅線」を当てさせるものが収録されている。

このほか、楊春農編『絶妙集』（光緒六年（一八八〇）自序付）に「旅人先笑後号咷　半途喜変憂」と、『易経』に見られる言葉を謎面にして⑦を当てさせるものが収録されている[39]。

このように、「油葫蘆」と同様、「鬼三台」も⑥⑧を除くほとんどの句が謎面か謎底にされてきたのである。

なお、③を謎底にするものは前掲した梁章鉅の『浪跡叢談』に「周公植璧秉珪、乃告太王、王季、文王　説哥哥病久」として収録され、その後『灯謎新編』に「告太王、王季　六才　説哥哥病久」、『絶妙集』に「武王有疾、周公植璧秉珪、乃告太王、王季、文王。　説哥哥病久」、光緒八年（一八八二）刊の『廿四家隠語』所収の「嘯引山巣摘録」に「乃告太王、王季、文王。　説哥哥病久」とあり[40]、これらの謎面は『尚書』からの引用である。その長さに違いはあるが、ほぼ同じものが収録されている。これに対し、光緒十四年（一八八八）に刊行された『新灯合璧』所収の「静軒主人灯虎」には「惟爾元孫某遘厲虐疾　六才一句　説哥哥病久」と[41]、光緒十七年（一八九一）に成立した『隠林』所収の「史隠」には「曹大姑為超上書　六才子書一句　説哥哥病久」と[42]、それぞれ『尚書』の別の箇所と『後漢書』班超伝の話が使われた、目新しさのある謎語が収録されている。

また、④についても光緒三年（一八七七）に刊行された『閑情小録初集』所収の「文虎」には『竜山灯虎』と同様[43]、「負荊　背着夫人」が収録されるが、前掲した『絶妙集』には「負荊　背著夫人」が収録されると同時に、「鐘建負季芈　背著夫人」と『左伝』の話を引用して④を当てさせるという新しい試みが窺える謎語も収められている。

企杜は『竜山灯虎』の序文に、

古有以詩影物於寺観之壁、名曰灯。商灯謎其遺制也。吾邑文人韻士、往往為之闘巧争奇、美無不備。古に詩を以て物を寺観の壁に影する有り、名づけて灯と曰ふ。商灯謎其の遺制なり。吾が邑の文人韻士、往往にして之が為に巧を闘はし奇を争ひ、美の備はざる無し。

と述べ、『余生虎口虎』の袁祖志序に、

吾友上元葛君芝眉、天資穎異、博学多聞。（中略）謀生之暇、嘗与二三同志各闘心思、楽酒今夕。此射一語、彼酬一觴。積而久之、盈篇累幅。吾が友上元の葛君芝眉、天資穎異にして、博学多聞なり。（中略）謀生の暇に、嘗に二三の同志と各心思を闘はし、今夕に酒を楽しむ。此一語を射つれば、彼一觴を酬ゆ。積みて之を久しくし、篇を盈たし幅を累ぬ。

とある。こうした記述からは、清代の謎語愛好者が宴を楽しみながら、新奇な謎語を作ろうとする場面が目に浮かぶ。また、拈花道人が「文虎」の序文に「茲読嘯園主人所手輯、皆掃去陳腐、独標新穎。」（茲に嘯園主人の手づから輯する所を読むに、皆陳腐を掃ひ去り、独り新穎を標すのみ。）と述べるように、清代に編纂された謎語作品集の多くは可能な限り新しく作られたものを収録する方針を取っている。

このことについて、呉修喆氏は「明末の日用類書から見る灯謎」で[44]、

清代以降に見られる灯謎の変容を一言でいうならば、民俗活動や応酬交際の場で人々が集まり、謎を解いて楽しむような本来の姿から次第に離れ、漢字や経典をいかに巧みに利用して謎を作ったか、その出来栄えを作者同士で競い合うようなものと変わっていった。

と指摘している。このような目新しさを追求する環境の中で、明代から既に絶大な人気を博し、「人として読まざる無きに幾」かった『西廂記』は自然と謎語創作時に愛用される作品の一つとなっただろう。

おわりに

今日に至っても、『西廂記』はなお何かしらの形で人々の前に現れている。物語の一部は学校の教材に取り込まれており、漫画やドラマの改作も制作されている。また、その名場面を絵にする記念切手も発行されたことがある。もちろん、同作品と関わりのある謎語は民国に入っても謎語作品集に続出しており、現在でも作られ続けている。

時代を遡ると、明代には既に『西廂記』と関わりのある謎語が現れ、元宵節に人々に当てさせて楽しむだけでなく、普段の酒席でも酒令としても遊興に供された。このような現象は清代に入っても、なお続いており、同作品と関わりのある既存の謎語の一部を継承している。一方、これまでに使われたことのない同作品の内容を引き、新しい謎語を作るか、同作品が謎底とされる場合はその謎面を変えることによって新しさを生み出そうとするような作者の試みも強く窺える。

『水滸伝』『西遊記』『紅楼夢』のような長篇小説は長

さの関係で謎語に取り込まれにくい要素があるのに対し、人気がどの戯曲や小説にも負けない『西廂記』は、その物語の簡潔さと精錬された内容によって、戯曲や小説の中で、最も多く酒令や謎語に取り込まれる作品となった。

これらの『西廂記』と関わりのある謎語や酒令はほとんどが原文の意味から離れているが、それらを通して、『西廂記』が人々の生活に深く浸透している事実は無視できない。

『西廂記』は誕生してから、同作品を読む、鑑賞することにはじまり、徐々に変化し、同作品を用いて飲む（酒令、骰譜）、同作品について書く（八股文、改作）ものから同作品を歌う（小曲）、同作品を当てる（灯謎）ものまでさまざまなジャンルの作品が生まれた。『西廂記』があったからこそ、これらの関連作品が生まれたのではあるが、後者によって『西廂記』そのものもより一層人気を集めることになったと考えられる。

なお、『水滸伝』『西遊記』『牡丹亭』『紅楼夢』といった大人気の戯曲や小曲と関わりのある謎語は、『西廂記』ほど多くはないものの、それぞれ作品の受容の一端を反映するものとして考察に値する。これについては、稿を改めて論じたいと思う。

注

[1]拙稿「『西廂記』と八股文について―『唐六如先生才子文』を中心に―」（『中国中世文学研究』第七十号、中国中世文学会、二〇一七年）、「『西廂記』と酒令―『西廂記酒令』を中心に―」（『中国中世文学研究』第七十一号、中国中世文学会、二〇一八年）を参照。

[2]『書房一角』（新民印書館、一九四四年初版、一九四五年再版）。

[3]銭南揚『謎史』（国立中山大学語言歴史研究所、一九二八年）、陳光堯『謎語研究』（商務印書館、一九三〇年）、楊汝泉『謎語之研究』（大公報社、一九三四年初版、漳州灯謎協会、一九八二年翻印）、陸滋源『中華灯謎研究』（江蘇科学技術出版社、一九八六年初版、一九八七年再版）。現在一般的に灯謎は文義謎を指し、謎語は事物謎を指すとされているが（詳しくは江更生・朱育珉編『中国灯謎辞典』「灯謎」、「事物謎」条を参照。なお、陸氏も『中華灯謎研究』謎源篇「謎的演変」において灯謎と謎語の区別について論じている）、灯謎を収録する作品集にも事物謎が存在するため（例えば、張岱『快園古道』灯謎に「傘」や「筆」を当てさせる事物謎がある）、このような定義には問題があると思われる。呉直雄氏が「新版『辞海』『謎語』条考辨」（『江西大学学報（哲学社会科学版）』一九八七年第一期、江西大学学報編集部）で「総之、従謎語分類的歴史和現状来考察、謎語応該是一切形式謎的『母題』、而事物謎和灯謎僅僅是謎的『子題』而已、『母題』与『子題』並列相称、当然不妥。」と指摘しているように、灯謎と事物謎は謎語に含まれていると考えたほうが妥当だと考える。したがって本論文では文義謎と事物謎をあわせて謎語と呼ぶ。

[4]呉修喆「『灯謎』をめぐる文人意識の変化―謎話から得られる考察―」（『アジア地域文化研究』第十一巻、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部アジア地域文化研究会、二〇一五年）、「明末の日用類書から見る灯謎」（『中国―社会と文化』第三〇号、中国社会文化学会、二〇一五年）。なお、同氏には「言語遊戯から文字遊戯へ――漢字字謎の形成について」（『伝承文化研究』第八号、国学院大学伝承文化学会、二〇〇九年）、「近代における漢字文化新分野の形成―文義謎を例として―」（『アジア地域文化研究』第九巻、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部アジア地域文化研究会、二〇一三年）という字謎に対する論考がある。

[5]黄山書社、二〇〇八年。

[6]立命館出版部、一九三二年。

[7]西湖書社、一九八一年。

[8]ここでは、『中華謎書集成』第一冊（人民日報出版社、一九九二年）所収『詩禅』を使用した。

[9]例えば、蔣雁峰『湖南酒文化』（中南大学出版社、二〇〇八年）第九章「湖南酒令、酒歌」謎語酒令に「把酒令与灯謎結合起来、明代末年湖南湘潭人黄周星是第一人、也是迄今為止、唯一把謎引入酒宴以行觴政的一個文人和詩人。」とある。

[10]早稲田大学図書館風陵文庫蔵清道光年間刊本を使用した。

[11]拙稿「明清楽から見る江戸時代の『西廂記』故事の受容について」（『中国中世文学研究』第六十九号、中国中世文学会、二〇一七年）。

[12]前掲注[8]書所収。

[13]前掲注[8]書所収。本書は具体的な成書時期が分からないが、張雲竜が崇禎十六年（一六四三）に書いた自序が付されている。

[14]前掲注[8]書所収『広社』解題、『竹西春社鈔』解題に詳しい。

[15]このことについては、王穎・黄強『遊戯八股文研究』（武漢大学出版社、二〇一五年）第三章「『西廂』制芸及其版本研究」に詳しい。

[16]前掲注[8]書所収『廋詞』解題に「『廋詞』現見有三種版本。当今謎界較熟悉的是『昭代叢書』本。『昭代叢書』最初成書於清康熙三十六年丁丑（一六九七）、為張潮所編。『廋詞』載叢書第五軼三十八巻。道光年間、沈楙恵続編『昭代叢書』時、把他認為『適情玩物之篇』六十種另作一編、名為別集。『廋詞』被編作別集的第十二篇。文字上略有改動。咄咄夫『一夕話二刻』也収有『廋詞』。内容与『昭代叢書』康熙版基本一致。…光緒十一年乙酉（一八八五）、正音書屋以『八詠楼新編灯謎』為名出版一書、内容即是『廋詞』。」とある。なお、本論文の引用は前掲注[8]書所収『廋詞』による。

[17]中華書局、二〇〇五年。

[18]前掲注[8]書所収。

[19]ここでは、九州大学附属図書館益田文庫所蔵本を使用。な

お、『酒令叢鈔』所収の「西廂記酒令」同条は「夫人只一家。〔同姓飲〕」（夫人は只だ一家。〔同姓 飲め〕）となっている。「西廂記酒令」については、拙稿「『西廂記』と酒令―「西廂記酒令」を中心に―」（前掲注[1]論文）で詳しく論じた。

[20]前掲注[8]書所収。

[21]『解人頤広集・消閑集』は「鶯鶯焼夜香、香頭在香几上。分明是張秀才、却原来是法聡和尚。」とする。

[22]『中華謎書集成』第二冊、人民日報出版社、一九九三年。

[23]『浪跡叢談・続談・三談』（中華書局、一九八一年初版、一九九七年再版）所収『浪跡叢談』巻七「雑謎続聞」。

[24]『邃漢斎謎話』、商務印書館、一九一七年。

[25]『柳南随筆・続筆』（中華書局、一九八三年）所収『柳南随筆』巻三。

[26]前掲注[8]書所収。

[27]例えば、同書巻下所収の「岩　西廂一句　大家是落日山横翠」は『第六才子書』四之三「四辺静」曲「両処徘徊、大家是落日山横翠。」に一致する。清の梁廷枏も『曲話』において金聖歎の『西廂記』に対する改編を論じる時に、上の例を用いた。なお、本稿は台湾国家図書館蔵金谷園刊『貫華堂第六才子書』を使用する。

[28]この一条は「拷紅　牡丹亭一句　吃的是夫人杖」（紅（娘）を拷問する　『牡丹亭』にある一句（を当てさせる）　受けたのは夫人の刑杖）である。

[29]前掲注[22]書所収。

[30]なお、許徳隣は「文虎」（『文芸叢書』巻九、崇文書局、一九二六年）に「四子書人多習誦、故以『四書』作灯謎者最多。」（四子の書 人 多く習誦し、故に『四書』を以て灯謎を作る者最も多し。）と指摘している。

[31]同作品（『元曲選』第三冊所収、文学古籍刊行社、一九五五年）第一折に「〔正末云〕不是這等説、是読書的『春秋』。〔王仲略云〕小生不曽読『春秋』、敢是『西廂記』。」（〔正末は言う〕そのようなことではなく、本としての『春秋』です。〔王仲略は言う〕小生は『春秋』を読んだことがないが、『西廂記』のことでしょうか。）とある。このことについて、黄季鴻氏の「論『西廂記』天下奪魁」（『吉林広播電視大学学報』二〇〇三年第二期、吉林広播電視大学）に言及がある。

[32]例えば、尹直『謇斎瑣綴録』（台湾学生書局、一九六九年）巻之五に「劉主静先生一日過吏部前、見鬻書者陳設群籍、中有『崔氏春秋』。意謂常見『呂氏春秋』、不知崔氏亦有『春秋』。到家、即以数文銭急令隷人往易以来、展観、乃是『西廂記』、因笑而斥之。」（劉主静先生 一日吏部の前を過ぎ、書を鬻ぐ者の群籍を陳設するを見るに、中に『崔氏春秋』有り。意に謂へらく常て『呂氏春秋』を見るも、崔氏に亦た『春秋』有るを知らず。家に到るに、即ち数文銭を以って急ぎ隷人をして往きて易へて以って来らしめ、展ばして観るに、乃ち是れ『西廂記』なり、因って笑ひて之を斥く。）とある。

[33]『綴白裘』所収の『西廂記』折子戯について、趙春宁『『西廂記』伝播研究』（厦門大学出版社、二〇〇五年）第三章「『西廂記』的演出伝播」、伏滌修『『西廂記』接受史研究』（前掲注[5]書）第三章「『西廂記』的演唱」、黄冬柏『『西廂記』変遷史の研究』（白帝社、二〇一〇年）第五章「『西廂記』の上演―案頭書から台上曲へ―」に論じられている。

[34]『棗園春灯話』（商務印書館、一九一七年）巻下。

[35]前掲注[8]書所収。

[36]前掲注[8]書所収。

[37]前掲注[8]書所収。

[38]前掲注[8]書所収。

[39]前掲注[8]書所収。

[40]前掲注[22]書所収。

[41]前掲注[22]書所収。

[42]前掲注[22]書所収。

[43]前掲注[8]書所収。

[44]前掲注[4]論文。

※　本研究はJSPS科研費19K23042の助成を受けたものである。